

エキゾチスムよりユマニスムへ

—— 木下杢太郎のパリ ——

今橋 映子

I かれいどすこおぶ 萬華鏡の世界——パンの会の追憶

明治～昭和期を通じて医学、劇作、詩、水彩画という多彩なるジャンルに独自の仕事を成した木下杢太郎（1885～1945）という人物。医学上でも、また文学上でも彼の恩師となった森鷗外に似て、木下杢太郎は、その端正な文体と手堅い著作によって世に知られる「文人」である。

杢太郎は、大正10年から13年まで、医学研究の目的のためにパリに留学し、「リュウ・ド・セイヌ」「大寺の前の廣場」など、滋味深い小品を私たちに残してくれている。だが彼とパリとの関係を論じる時、忘れてはならないのは、それよりはるか以前、20代の学生時代に加わった「パンの会」の活動であり、それがいかに、のちの彼自身のパリ体験とは異質の、エキゾチスムであったかを知ることであろう。

明治41年暮より、44年頃にかけて、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、石井柏亭、高村光太郎ら、血気盛んな文学者、画家たちがおこした「パンの会」は、隅田川をセーヌに見立て、芸術談義に花咲かすカフェ運動として、すでに良く知られている。ちょうどパリより帰国したばかりの高村光太郎は、父光雲との彫刻上や、人生上での葛藤から自暴自棄な日々を送り、その中でパンの会の活動に加わった。

青春の爆発といふものは見さかひの無いものだ。若さといふもの的一致だけでどんな違った人達をも融合せしめる。パンの会当時の思出はなつかしい。いつでも微笑を以て思ひ出す。(…) 銘々が自己の内から迸る強烈な光で互に照らし合つてゐたのだ。いつ思ひ出しても滑稽なほど無邪気な、燃えさかる性善物語ばかりだ⁽¹⁾。

パンの会の連中は「何だか普通の人と違っているので面白く」、彼らの「才気横溢」にはびっくりして、「負けない気になつて、自分も馬鹿にえらがつたり、大言壮語したり、牛飲馬食したり、通がつたり、青春の精神薄弱さを遺憾なくさらけ出した

ものだ⁽²⁾」と、光太郎は愛情をこめて回想している。

パンの会は最終的には、酒を飲んで騒ぐだけの会になってしまったにもかかわらず、岩村透が提唱した琴天会（のちの龍土会）などと共に、明治期日本における前衛芸術運動の先駆と位置づけることができるだろう。そしてその大きな特色の一つに、光太郎を除くメンバーたちが皆、未だ外遊経験をもたない若者たちであったということが挙げられる。彼らの中心的存在であった北原白秋に至っては、生涯外遊する機会すらもたなかった。それだけに、のちに白秋に私淑した詩人萩原朔太郎がうたったように

ふらんすへ行きたし思へども
ふらんすはあまりに遠し

（「旅上」大正2年）

というかの有名な詩句はまた、当時の青年たち共通の感懐であり、ため息にも似た憧憬の念だったのである。

パンの会は、その会合の席を、隅田川のほとりに求めた。何人かの証言をまとめると図1のようになることがわかる。特に、小伝馬町にあった三州屋は彼らの気に入りの店であつたらしい。それは下町情緒の残る、古風な問屋が軒を並べている街区にあつたにもかかわらず、「第一国立銀行時代の建築の面影を伝えている西洋館⁽³⁾」（空太郎）であつた。三州屋での大会には、おかみが芳町の一流芸者を呼んでくれる賑わいで、私たちはその会合の面影を、若き洋画家 木村荘八の油絵（『パンの会』昭和3年図版1 a）や、空太郎自身の水彩（図1 b）にもしのぶことができる。

隅田川をセーヌやアルノ川に見立て、西洋料理屋に芸者を呼んで、フランス文学や、印象派を論じ、酒に酔い騒ぐ会合——未だパリを見ぬ青年たちの芸術運動のもう一つの特徴は、それが、彼らの一世代上の岩村透、黒田清輝などパリから帰朝したばかりの洋画家たちの超ハイカラなボヘミアニズム⁽⁴⁾とは異なって、西洋と江戸とが交錯する、退嬰的で、内向的な夢の世界であつたということであろう。そしてその世界を最も良く表現し得たのが、若き木下空太郎なのであつた。

空太郎は「パンの会の回想」及び「『パンの会』と『屋上庭園』」という二つの回想文をのちに残しているが、その中で彼は次のように述べている。

我々の思想の中心を形作つたものは、ゴッホエ、フロオベル等を伝はつて来た「芸術の為めの芸術」の思想であつた。この思想的潮流には本元でもエキゾチスムが結合した。

必然我々の場合にもエキゾチスムが加わつた。欧羅巴文芸それ自身が既にそれであつたが、別に「南蛮趣味」が之に合流して、少しく其音色を和らげ且つ複雑にした。浮世絵とか、徳川時代の音曲、演劇といふものが愛されたが、それはこの場合、伝承主義でも古典主義でも、国民主義でもなく、やはりエキゾチスムの一分子であつた。浮世絵は寧ろゴングウルやユウリウス・クルトやモネやドガなどの層を通じて初めて味解せられた。「パンの会」が日本橋瓢箪新道の三州屋と云ふ小さい古風な西洋料理屋で行はれたのも、そこに明治初年のエキゾチスムの残渣が、幾分の下町の浮世絵的趣味と共にこびりついて居たからである⁽⁵⁾。

空太郎には、このパンの会時代に書かれた詩集『食後の唄』（大正8年）があるが、それに挿入された一枚の絵（図版2）が、彼の「エキゾチスム」をよく表象している。

これは、一高時代に画学会をつくり、三宅克己に師事したこともある空太郎自身の画である。コンテ画であろうか。全体の印象は、やはり油絵というよりも水彩画に近い。天井まで大きく取られた^{ガラス}ガラスの窓と、レースのカーテンがゆったりと掛かる明るいレストランから、倉造りの並ぶ河岸が見える。隅田川から陸へ入りこむ運河の一つだろうか。水は、画面の奥へ流れ行く。室内の床のタイルを見ると、遠近法の消点は、ちょうど遥か水の流れが茫洋とする辺りに定められていて、見ている者の視線は、川船などに止まりながら自然に遠く吸い込まれていく。

この絵と交錯する詩を、『食後の唄』から探してみると、次の一節が浮かび上がる。

（・・・）

灘の美酒、菊正宗、

薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて

レストウラント
旗亭の二階から

ぼんやりとした、入日空、

夢の國技館の圓屋根こえて

遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば

なぜか心のこがる⁽⁶⁾

（「兩國」明治43年）

例の絵には国技館は見えぬが、詩中にあるレストランの二階で、「薄玻璃」に注いだ透明な日本酒——という明るさには共通のものである。その静かな明るい西洋レストランと、そこから見える江戸風の河岸風景という意外なコントラストは、空太郎の好んだ「情調」であつたらしい。例えば次の詩では、

(・・・)

冬の夜の静けさに
褐く澄む、該^{セリ}里の酒。
さう云ふは呂昇の聲か、
乃至その酒のしわざか。
幕あけて窓から見れば
星の夜の小網町河岸
舟一つ…かろき水音⁽⁷⁾

(「該里酒」明治44年)

というように、シェリー酒の赤さや、室内の暖かい沈みこむような空気と、窓の外の星も冴々とした冬の小網町河岸との対比へと、変奏されていく。そして重要なのは、この二つの詩にも、彼自身の挿画にも、西洋風の室内の親密さと、窓外の川や江戸風景が取り合わされることで、それが読者に軽い衝撃を与えているということである。

再び画の方に戻ってみよう。前述したように絵自体は、窓の外の水の流れのゆくえへと、私たちの視線を誘うのに対し、この画中の男は、室内にも、外の河岸にも全く注意を向けていない。丸いテーブルの上の皿には…何と女の生首を載せ、それにそっと左手をかけながらじっと見つめ、うつむいて瞑想している——何とも奇怪な姿である。一瞬ピアズレーの「サロメ」の挿絵を想起こそが、李太郎の画に漂っているのは、穏やかな優しい時間だけである。こちらに顔を上げずにその女と二人だけの世界に閉じ込められている男を見ているうちに、この女の生首は実在するのかもしれないという不思議な幻想に、こちらもとらわれてくる。

紅玻璃燈の下に、重く光る液體を充したる小高脚杯を前に置いて、予は予の前の中に擾亂する亞刺比亞夜話の復活を諦観した。その中には鯉の切身を持つて立つ大屋、中央亞細亞の庫車から出たと云ふ塑像^{ちよこれいと}の佛頭、傳問答師作の阿修羅の首、乃至それよりも美しい豊竹昇菊の頬(…)また檜^{ちよこれいと}杏、杏仁の實の味などか、歌の如く、螢の如く、初夏の雹の如く、山羊の叫喚の如く、汽船の後に残る白浪の如く、洶湧し、卷舒し、回轉し、出没して狂奔した⁽⁸⁾。
(『食後の唄』序)

紅いガラスの燈の下で、酒を前に置いて、「自分の前の中に擾亂」する風景を凝視するのは、画中の男も同様であろう。すさまじい幻想が彼の前に渦まき、そして明滅している。すると、女の生首もまた、そうした瞬間の幻影の一つなのだろうか。あるいは「Rodinの銅像の首の脣に寄せた皺の粘さが何う云ふ情を蔵くしてゐるか

が分る⁽⁹⁾」のようになった青年の、エロティシズムの表象なのかも知れない。

自分をとり囲む現実から「心のこがるる」エキゾチックな美の要素を自在にとり出し、そのぶつかり合いの中に、独自の夢の世界を生み出すという手法。空太郎自身、その世界について「萬華鏡」のようだと形容しているが、それをよりの確に言い得ているのが白秋である。

彼〔空太郎〕は比類稀な詩境の発見者であった。だが惜しい事にはあまりその効果を整理しようとはしなかつた。(…)だから彼の背後には、常に勿體ない程複雑は複雑の儘に、美は美の儘にただ燦々爛々と取り散らされてあつた⁽¹⁰⁾。

この評言は、空太郎の世界のみならず、パンの会の芸術家たちに共通した心象風景を表現している。南蛮趣味と、江戸趣味と、ヨーロッパ趣味の「燦々爛々」たる「取り散らし」こそが、彼らの世界であり、個々の事物が、歴史や精神などを支えにして、一定の方向に秩序立って組み上がっていくことはない。

あまつさえ彼〔空太郎〕は、清親の錦絵の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舗を漁り、紅提灯と紙の櫻のかげに、かの阿蘭陀のラベिका弾きの如く、椅子の上にロチの女を乗せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた⁽¹¹⁾。

白秋は、パンの会の世界を、このような散文詩ともいえる文章をもって語っている。隅田をセーヌに見立て、西洋料理屋をカフェに見立て、アメリカ系パリ案内小説を朗読して感動した空太郎⁽¹²⁾たちは、異国の都市の現実と向かい合うことはなかった。彼らにとってパリは、カレイドスコープの一つのきらきらとした断片として、その内向的な耽美の世界を形づくる、一つの大事な要素としてのみ、存在していたのである。

Ⅱ ユマニテの発見——木下空太郎のパリ体験

先にも引いた「パンの会の回想」および『『パンの会』と『屋上庭園』』という回想文は、この明治末芸術運動を考える際に、必ず用いられる資料である。空太郎はそこで確かに、パンの会の経緯と、それを取り巻く文芸状況を手際良く書いているのだが、今までとかく問題にされていないのは、想起している本人の意外にも冷めた口調である。例えば、「パンの会の回想」(昭和2年)を読み直してみると、

四五年前まではあの時代を懐しいことに思ひ、時々回想したが、今はもうあまり時が隔つてしまひ、大して興味を感じない⁽¹³⁾。

という一節が、しかも冒頭からあることに気付く。李太郎は、「時が隔つてしまったから」懐かしさを感じないと語るが、果して本当にそうだろうか。例えば先にも引いた高村光太郎の方は、同じ『近代風景』に掲載された回想記で、あの当時の思い出は懐しく、「いつでも微笑を以て思い出す」と書いているのではないか――。

ここで改めて考えなければならないのは、李太郎のパンの会回想記が、いずれも彼の外遊後に書かれたという事実である。フランスより帰朝後に、パンの会に加わった光太郎とは正反対に、李太郎はパンの会の活動後に外遊している。実際明治44年、東大医学部を卒業してからの彼の人生は、学生時代にパンの会で耽っていた退鬱的な夢の世界とは、あまりに縁遠いものとなった。彼は、医学部では土肥教室に入って皮膚科の道を志し、大正5年、就職のため満州に渡る。その翌年には、姉が後妻として入った河合家の先妻の長女と、いわばお膳立てされたままに結婚することとなる。大正7年8月、東京で詩集『食後の唄』の長大な自序を書いたのが、実質的にパンの会との別れの時と見て差しつかえないだろう。満4年にもわたる満州時代を境に、彼の「異国趣味」はそれまでとは全く異なった様相を見せるようになる。特に大陸で、彼は医学上では糸状菌の研究をはじめ、また東洋美術の世界に開眼したことが、偶然にもその双方の分野で研究水準の高さを誇るフランスへと目を向けるきっかけとなった。

そして新田義之氏が述べるように⁽¹⁴⁾、李太郎が満州時代に、飛鳥、白鳳の美術を、中国文明の地方的波動の相と捉えたこと――その視点こそが、李太郎における異文化の在り方の変化を如実に物語っている。すなわち、自らの内面の夢を形づくる要素にしかすぎなかった異国の文化は、歴史という展望の中に有機的に位置づけられ、その意味を問われ始めたのであった。従って、李太郎がフランスへ渡る大正10年頃から、パンの会の存在が、彼の中から急速に遠ざかっていったのは、やむを得ないことであっただろう。

それでは李太郎は、パンの会時代といかに隔った眼と精神で、実際にパリという異文化と対面したのであろうか。

木下李太郎は、大正10年(1921)10月末日にパリに到着し、大正13年5月まで滞在した。彼はすでに30代も後半、「留学」というには、あまりに遅い年齢である。彼の本来の目的は、実際「留学」ではなく、サン・ルイ病院サブロー教授の下での糸状菌の専門研究にあった。とはいえ、最初の3ヶ月は、特定の研究所には所属することもなく、パリ生活を楽しんだらしい。当時の仏―日本語交じりの日記を読む

と、その様子が詳細にわかる。空太郎のパリでの唯一の親友、美術評論家児島喜久雄にも、次のような回想記が残っている。

太田君〔太田正雄＝木下空太郎の本名〕が来てからは殆んど毎日行動を共にして居た。天気の良い日は美術館へ行つたり、展覧会を見たり、画商を廻つたりしてレストランやカフェで思ひのまゝに芸術を談じた。音楽会やオペラや劇場へも頻りに通つた。一緒にテオドール・デュレー氏を訪問したのも其頃だった。時としてグラントショーミエールのアカデミーの回数券を買つてデッサンをやりに行つたこともある⁽¹⁵⁾。

テオドール・デュレーは、マネと親交を結んだこともある老美術評論家で、日本の画帖類の龐大なコレクターとしても知られたジャポニザンでもある⁽¹⁶⁾。空太郎たちは、老デュレーに面会したあと、装飾美術館に、マネの「草上の昼食」を早速に見に行つたり、またその同じ日の晩に、児島の肖像のデッサンを試みたりと、パリの会時代に憧れていたようなパリの美術家生活をつかの間楽しんで⁽¹⁷⁾。

さて到着して一ヶ月後の日記に、次のような記述がある。

avec Kondó, à un Café.

午後2時半 Mr, Kojima, Mr Hozoumi et M^m Hozoumi ト Salon d'Automne ニユク、

Thé

雨、Discussion sur et pour la France.

児島君12時頃まである。(大正10年11月3日)⁽¹⁸⁾

フランス語の練習のためか、動詞の活用や、冠詞が省略された、たどたどしい日記だが、秋のサロンを見学したあと、夜更けまで話しこむ姿が、彷彿としてくる。それではこの中にある「フランスについて、そしてフランスのための議論」とは、一体何を指しているのだろうか。

この日記の10日後、11月13日付河合浩藏宛の手紙では、

仏国は戦争前の繁栄には比すべくも無く候べきも尚ラテン族正系の文明及び文明感情は学ぶべき処甚だ多く感ぜられ候 英吉利に於て国家繁栄の長久なる所以を見仏国に於て欧州文明の精華を知るを得申候⁽¹⁹⁾。

と書き送っている。空太郎にとって「言葉の為めと、一般文化の感得の為に専ら費した三箇月の間は、巴里は実に甘美であった⁽²⁰⁾」に違いなかった。しかしその裏に、ラテン文明の影があることを、満州の経験を経てきた彼は、もはや見逃さな

かったのである。11月27日付の妻への手紙でも、

現在の^{【ママ】}仏フランス文明には感心できない。然しここでは希臘、羅馬正系の伝統を研究することはできる⁽²¹⁾。

と同様の感想を書き送っている。

そして、大正12年1月26日、サン・シュルピス広場のホテルに移居した頃から、杢太郎の中に、フランス文化を支えている基層への関心は、急速に高まっていき、日記や書簡ではなく、まとまった小文を成すほどになるのである。

それは何よりも、サン・シュルピス広場の静かな生活が、彼にもたらした成果であった。「大寺の前の広場」(大正11年6月)と、「サン・シュルピスの広場から⁽²²⁾」(同年同月)は、杢太郎の滞仏中の数少ない作品であり、また大変に味わい深い散文である。その静かなトーンの裏を流れているのは、彼が当時読み進めていたアナトール・フランスの『わが友の書』(*Le livre de mon ami*, 1925)であろう。子供時代の思い出に、心地良くたゆとう瞑想の時間。そのような内省の静かな状態の中で、杢太郎はサン・シュルピス寺院に入っていく、「わたくしに静かな生活を与えて下さいまし」と祈る他は無いほど、もはや「不思議な経験もアワンチュウル」も望んではない。

「大都会の孰れもののやうに」どんより曇った午後、彼は、パテやコキーユの軽い昼食を取りながら、「まだ写真術と云ふものが発見せられぬ時代の巴里案内の本の中に出て来そうな」広場の物静かな光景を眺めている。それは巡査と、街の人々との、のどかな昼下りである。日本では威張り散している巡査が、ここでは白い毛織物にくるまった乳呑子——しかも捨て子を抱いている……そのような光景を、語り手は静かな目で見守っているのがあった。杢太郎は、アナトール・フランスが、幼年時代の思い出と結びつけて愛しているこの広場を、あたかも自分の思い出の場所でもあるかのように、眺めている。

或る日曜の朝一人の労働者らしき老人が、連れて来た犬をこの広場に放つた。犬は縛を解かれて一時興奮し、すさまじい勢ひで飛び出し、通る人に吠え付いたが、やがて主人のそばへ戻つて来た。車道の方へはちつとも飛び出さない。幾度か幾度か同じやうなことを繰返して、到頭主人の傍に静かに腰を下してしまった。

歴史長き都会に於ける静かな一つの小さい生活⁽²³⁾。

ヨーロッパの都市に行ったことがある者なら、こうした情景がいかに現在でも変

わらぬ「一つの小さい生活」であるか、実感する人も多いであろう。ある成熟した文化が到達した先に、永遠に変わり得ぬ「静かなる一つの小さな生活」が存在するという認識。その底に堆積する、目も眩むような歴史の長い時間。パンの会時代の李太郎が決して知り得なかったヨーロッパ文化の深い魅力に、彼は気づき始めた。ところが彼は同時に、次のようにも認識する。

わたくしは巴里に来て、この国の言葉及び言葉の歴史に関して甚だ多くの研究のあることを知った。此国の人の其国語を尊重するのは思半に過ぎるものがある。言葉と云ふものに特に興味を有するわたくしは、一国語の習得の実に困難であることを体験した⁽²⁴⁾。

彼は、パリの静かで永遠の文化には、それを支える言葉という厚い基盤があることを痛感している。しかもさらに彼は、深刻な事態に直面する。

何といても、我々の西洋に来たのは遅過ぎました。もつと若く世間の事を顧る必要のない学生として此処に來り、少なくとも四五年居なくては欧州文明を味ふことは出来ません⁽²⁵⁾。

李太郎は、ちょうどこの年（大正11年）の2月から、遊学生活に終止符を打って、サン・ルイ病院サブロー教授に本格的に師事し、専門生活を開始していた。そうした多忙な実生活や、また一方では、日本に残した妻やその実家との様々な不和が、心労となって、このような弱音を吐かせたと見ることもできよう。

だが、それ以上に決定的だったのは、「歴史長き都会の静かなる一つの小さい生活」の底に、目もくらむほど蓄積している文明を、その言葉から理解していかない限り、現代のヨーロッパ文化に近づく道はない——という、学者としての彼が分析する、恐ろしいまでに明晰な事実だった。実際医学者 太田正雄は、パリ時代、細菌学に関する基本的文献を、タイプライターで膨大にコピーし、また「太田、ランゲロン糸状菌分類法」なる一大業績をおさめている。彼自身はもはや時間的に、そして年齢的に、医学以外の道に深入りできない自分を卑下し、「儼いじり」しか自分には残されていないと語っている。そしてこの問題は、諦めという形で終結するどころか、結局帰国するまで繰り返し彼を苦しめる重石となっていくのである。

こうなってくると、パリの風景自体が、違うかたちで彼の眼に映る。

巴里に来て裏街を歩きながら、さう感ずる。何か或るものが在るやうである。それでゐて分からない。明き盲が本を看るやうである。無論それは、生新しいモニュマンでは

ない。鉛粉青黛の美人ではない。——歴史だ。——過去だ。——とそこまでは分る。自分には起源の分らぬものが好きになれぬ。東京が好きなのも、その源流の情緒が手に取るやうに分るからである。ピブリオテエク・ナショナルへでも往って、古い写本から十八世紀の巴里の俗謡でも捜し出すくらゐでなくては巴里も蔗境に入らぬ⁽²⁶⁾。

(大正12年7月4日)

この日に続く7月9日の日記には、滞仏中、最もまとまった考察が記されている。そこで、さらに展開されているのは、古典文化から継承されてきたフランス文化が、実は日本や日本人とは、全く接点のない別箇の体系である——という発見である。

滞在後四五日の巴里は全くすばらしい処らしく見えます。実の処を言ふと私は欧羅巴に倦きました。殊に巴里に。(…)仏蘭西の文明は殆ど全く自給自足の文明です。その点には実に驚嘆に値するところです。それ故外国の文明に対しては無頓着です⁽²⁷⁾。

フランス文化は、ギリシャ・ラテン文化を基層とする長い歴史の上にあり、しかも「自給自足の文明」であって、他を寄せつけない。豊かな閉鎖体系として、李太郎の前にあらわれたフランスから、今度は日本人である自分は、完全な異分子として孤立していく。そして、哀れな「異人」としての自らの姿が鏡の中に映し出されてくる。

……^{くるぶし} 蹠のかくれるやうな、だぶだぶした長い外套——肩幅を超えるほどに扁い顔——なほそれよりも飛び出した頬骨——その小さな眼は然しよく見ると、日本の雀の眼より滑稽さうに見える…どこかに容易く真似の出来るオリジナリテエが隠くては居ないか…どこかに女は居ないか…主としてこの二つのものを探す眼——黄疸やみが酒に酔つたやうな黄褐色——揚った左の肩、ごんた背中、飛び出した前歯、一寸法師⁽²⁸⁾。

明治以来、パリに赴いた日本人の中で、黄色人種として自分を卑下し、自国よりも「優位」にあるヨーロッパ文化の前に、手も足も出ない自虐的な自画像を描いた者は数多くあった。李太郎も、その系譜に連なる一人ではあるが、ただ彼独自の視点もある。すなわち、自給自足の文明の中では、ただ「キュウリオジテエ」(curiosité)の対象でしかない日本人は、ギリシャ・ラテン文明の精神に拠って、対等にフランス文化を味わえない限り、肉体的限界をも乗り越えることはできない——という、認識である。それは単なる感情論を超えた次元の認識であった。

大正11年11月13日、リヨンで、李太郎は日記に次のような断片を残している。

異 国

青年時代に私が憧憬した欧羅巴は、現に今私が見てゐるやうなものではなかつた。学校を出た数年間の不得意な生活の間に、私が毎夜宿直の室で空想して、どうかして有りつくことが出来たら、そしてけちくさい日本から遠離することの出来ると思つた処は、もつと絢爛で、もつと高雅で、もつと生々とした処であつた。そこから私は生の泉を酌むことが出来るだらうと想像した。丁度往昔九州諸藩の使者たちが羅馬へ行つた時のやうなそんな処であるだらうと思つたのであつた⁽²⁹⁾。

木下杢太郎は、滞仏時代、青年時より興味があつた南蛮学の研究を、本格的に再開している。壮年となって初めて赴いたヨーロッパは、絢爛で、高雅で、生々とした生の泉を与えてくれるどころか、思いもよらないラテン文化という頑丈な一枚岩として、彼の前に立ちはだかつたのであつた。

それならば、四百年前の少年使節や、支倉常長が、一体ローマに何を見、何を感じたのか——、そこには絢爛で高雅な世界が開けていたのか——それは、自分自身の問題を、過去に遡ることで解決していこうとする試みであり、そして又、フランス滞在で得た苦い認識を、彼なりにプラスの方向に転じようとする新たな歩みでもあつた。特に大正12年9月1日、関東大震災によって、満州時代に専心収集した東アジア美術関係の文献が灰塵に帰したことを知った時点で、彼は自分に唯一残された南蛮学の方向を確実に見定めるようになるのである。明けて大正13年の日記には、古典文明研究の不可能性について諦観や苛立ちが消えて、国立図書館や、セヌ通りでの古本屋で古文書を調査・複写する日々の記録があらわれ、南蛮研究への静かな意気込みがうかがわれる⁽³⁰⁾。

エキゾチスムからユマニスムへと、木下杢太郎という作家のフランス体験ほど、その鮮やかな軌跡を辿れるケースは少ないであろう。かつて、彼の中に同時に明滅していた「南蛮」や「欧羅巴」や「江戸」は、自身の西欧体験の中で、見事に深化され、だからこそ彼は、ヨーロッパという歴史長き文化の蓄積と、その頂点に存在する「静かなる小さい生活」を知り得たのである。そしてヨーロッパの頑丈な一枚岩にまともにもぶつかり、悩み、その中から、より彼我の文明が隔絶していた南蛮時代に遡って、当時の宣教師や使節たちの心理的葛藤に迫っていく——という軌跡は、杢太郎のみならず、実に第二次大戦後、次に遠藤周作によって、今度はカトリシズムとの関係の中に、問い直されていくのである⁽³¹⁾。

註

- (1) 高村光太郎「パンの会の頃」(『近代風景』昭和2年1月)『高村光太郎全集』筑摩書房、昭和32年、第9巻、142頁。
- (2) 同書、同頁。
- (3) 木下杢太郎「パンの会の回想」(『近代風景』昭和2年1月)『木下杢太郎全集』岩波書店、昭和57年、第13巻、157頁。以下全集と略す。
- (4) 拙著『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、平成5年)第3章-1「絵を描かぬ画家——岩村透『巴里の美術学生』新考」を参照されたい。
- (5) 杢太郎「『パンの会』と『屋上庭園』」(『日本文学講座』改造社、昭和9年)全集第15巻、351頁。
- (6) 杢太郎「両国」『食後の唄』(アララギ発行所、大正8年)。テキストは初版複製本(日本近代文学館、昭和56年)、6頁。
- (7) 杢太郎「該里酒」、同書、16頁。
- (8) 杢太郎「序」、同書、8頁。
- (9) 同書5頁。
- (10) 北原白秋「序」、同書、4-5頁。
- (11) 同書、4頁。
- (12) 拙論「白秋のピエロ——世紀末パリ案内小説の波及と詩的イマージュの形成」(『比較文学』第34巻、平成4年3月)を参照されたい。
- (13) 杢太郎「パンの会の回想」、156頁。
- (14) 新田義之『木下杢太郎』(小沢書店、昭和47年)97頁。
- (15) 児島喜久雄「太田正雄君と私」(『木下杢太郎全集』附録第9号、昭和25年1月)
- (16) デュレと杢太郎たちの関係についての最新論考は稲賀繁美「デュレを囲む群像——ジャポニズムの側面」(平川祐弘編『異文化を生きた人々』所収、中央公論社、平成5年)
- (17) 例えば、『木下杢太郎日記』(岩波書店、昭和55年)第2巻、大正10年11月10日付日記(359頁)、及び[日付不明](354頁)を参照のこと。以下日記と略す。
- (18) 杢太郎、日記第2巻、358頁。
- (19) 全集第23巻、240頁。
- (20) 杢太郎「大寺の前の広場」(『サンデー毎日』大正11年6月11、18日)全集第11巻、376頁。
- (21) 杢太郎、太田正子宛書簡[193]、全集第23巻、243頁。
- (22) 杢太郎「サン・シュルピスの広場から」(『サンデー毎日』大正11年6月25日)全集第11巻所収。
- (23) 杢太郎「サン・シュルピスの広場から」、前掲書、381頁。
- (24) 杢太郎「大寺の前の広場」、前掲書、375頁。

- (25) 壺太郎「巴里より」(『サンデー毎日』大正11年10月15日)全集第10巻, 398頁。
- (26) 壺太郎, 日記第2巻, 408頁。
- (27) 同書, 409頁。
- (28) 同書, 409頁。
- (29) 壺太郎, 日記第2巻, 437頁。
- (30) 例えば「リュウ・ド・セイヌ」(『大阪毎日新聞』大正13年7月), 全集第12巻所収。また日記第2巻, 437頁(大正13年3月23日)などを参照のこと。
- (31) 拙論「他者としてのパリ——遠藤周作『爾もまた』再読」(鶴田欣也編『日本文学のなかの他者』, 新曜社, 平成6年刊行予定)を参照されたい。

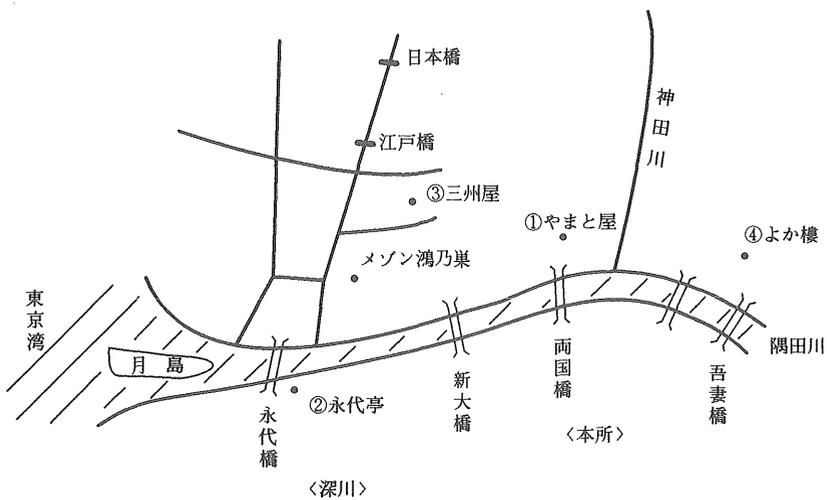


図1 パンの会の会合場所（時期順に①→④）

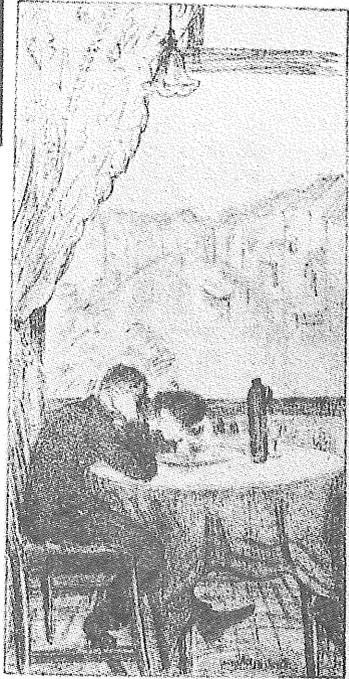


図版1a 木村莊八「パンの会」昭和3年，油絵



1 b

木下李太郎「Pan-no-kwai」 大正1年2月10日、
水彩（『食後の唄』挿画）



図版2 木下李太郎『食後の唄』挿画 大正8年頃、
コンテ画